

石川県七尾美術館だより

平成21年1月1日発行
編集・発行 石川県七尾美術館

第56号(冬号)



ISHIKAWA
NANAO
ART MUSEUM

「能登ゆかりの作品展12」より 「雪景山水図屏風」(部分)

佐々木泉景 1773~1848
江戸時代 天保8年(1837)
各縦157.0 横348.0 (cm)
個人蔵



展覧会紹介

平成21年2月21日(土)～

4月19日(日)

休館日については裏表紙をご覧ください

「能登ゆかりの作品展12」

～能登伝来の絵画たち～

～日常へのまなざし・山本隆の世界～

2月21日(土)～4月19日(日)

◇第一・第二展示室

当館の主要テーマの一つである、「能登地方にゆかりのある作家および作品の収集・展示」に基づいて、当館開館年の平成七年より開催している展覧会が「能登ゆかりの作品展」です。

能登地方はかつて「能登国」といわれた古くより、多くの文化活動が行われてきました。美術工芸の分野においては、古い歴史を持ちつつ現在も盛んに活動が行われている「輪島塗」や、かつて大いに繁栄した「珠洲焼」や「中居鋳物」などはよく知られるところです。

また、能登地方は桃山時代に大活躍し、現在日本を代表する画家として著名な長谷川等伯を筆頭に、過去から現在に至るまで多くの優れた作家を輩出しており、今日も能登出身、あるいは能登在住の多くの方々が幅広いジャンルで日々制作活動に邁進しています。

「能登ゆかりの作品展」は、それらの様々な美術工芸や作家などを展示・紹介することを目的として毎回テーマを設定し、これまで多くの作品を展示してきました。

十二回目の開催となる今回は、次の二テーマで当館の所蔵品及び寄託品より各作品を紹介いたします。



七尾市指定文化財
「絵社三番叟図額」 江戸時代
七尾市古府町会蔵

テーマ「能登伝来の絵画たち」

日本の歴史上、これまで無数の美術工芸品が制作され、そして伝承してきました。それらの中には戦乱や事故、自然災害などによって失われたものも多々ありますが、それでも今に伝わる作品が多いのは、歴代所有者の方々の並々ならぬ努力によるところが大きいといえるでしょう。

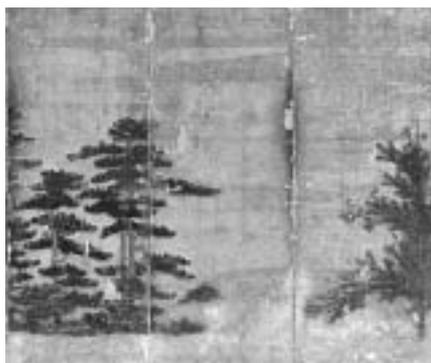
さて、能登地方各所にも大切に受け継がれた貴重な作品が残されており、当館では保存管理などを目的としてそれらの一部を寄託という形でお預かりしています。その内容はやはり能登地方ゆかりのものが中心で、絵画や工芸品、歴史史料などいずれも貴重な作品・資料ばかりです。

そこで、本テーマでは当館の寄託品より能登地方伝来の絵画に焦点をあてて、近世に制作されたものを中心に展示いたします。出品作品より三点を紹介いたします。

一、「松杉楨図屏風」 長谷川等誉筆

羽咋市 妙成寺蔵

長谷川等誉(？～一六三六)はその名前が示すとおり、長谷川等伯率いるいわゆる「長谷川派」の画家といわれますが、資料に乏しくその人物や活動経歴などは不明です。しかし、現存する作品状況により、七尾周辺を拠点とし、等伯とほぼ同時期の桃山～江戸時代前期頃に活躍していたと考えられています。現存作品は殆どが仏画ですが、本作品は金地の大画面に松・杉・楨の林を描いた屏風で、等誉が仏画のみではなく金壁画も描くことができる、桃山時代の気風を持ち合わせた画家であったことを示すものとして貴重です。



「松杉楨図屏風」(部分)
長谷川等誉 桃山時代
羽咋市 妙成寺蔵

二、「蘭図」 山崎雲山筆

輪島市蔵

山崎雲山(一七七一～一八三七)は江戸時代後期に活躍し、能登出身の文人画家としては、池野観了らと共に著名な存在です。絵画を独学で学び諸国を巡って文人達と交流し、多くの作品を描きました。それらは現在、出身地の羽咋など能登地域を中心として各地に残されており、「孤高の画家」と呼ばれる雲山らしく、とても独特で味のあ

る画風となつています。本作品は蘭と水流を描いた水墨画ですが、勢いのある草花の線や、うねる土坡の描法など、小品ながら雲山の特色が良く表れた作品といえます。



「蘭 図」 江戸時代
山崎雲山 輪島市蔵

三、「雪景山水図屏風」

佐々木泉景筆
個人蔵

佐々木泉景（一七七三〜一八四八）は江戸時代に活躍した狩野派の絵師で、京都で修行して画技を身に付け、後に郷里である加賀国に戻って加賀藩の御抱絵師となり、金沢城二之丸御殿内障壁画の制作など数多くの作品を描きました。泉景は能登の出身ではありませんが、加賀藩御用を勤める程の画家ですから、その作品は能登各地にも多く残されています。本作品はその一点で、六曲一双屏風の画面に熟達した筆致によって描かれた雪の山水風景は、まるで時が止まっているかのよう



「雪景山水図屏風」(部分)
佐々木泉景

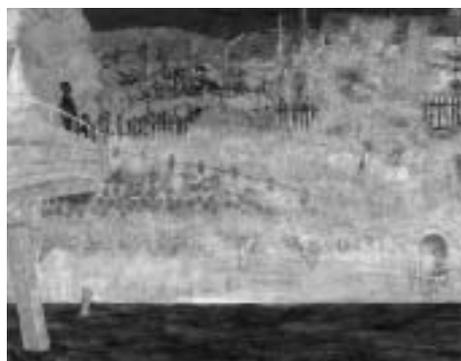
江戸時代
個人蔵

テーマ2 「日常へのまなざし・山本隆の世界」



「電車が通る」 昭和59年(1984)

山本隆氏は昭和二十四年（一九四九）、石川県輪島市に生まれ、金沢美術工芸大学で日本画を専攻し、在学中の昭和四十七年に日春展で初入選を果たします。大学卒業後は京都に移り、大学の恩師であった西山英雄に師事、以降京都を舞台に制作活動に励みます。そして昭和五十年に日展で初入選、その後も日展や日春展などを中心に出品を続け、同六十一年、平成八年には日展で特選を受賞して翌年会友に推挙され、一方日春展において



「東海道（土山宿）」 平成9年(1997)

も受賞を重ねました。現在も京都を拠点として精力的に制作活動が続けています。

氏は町の何気ない風景、例えば辻や路地、民家の庭や商店などの、ごく日常の生活風景をテーマに制作を行っています。その作品を見ていると、まるで何かフワツとした毛布で包み込まれるような、心地よいぬくもりを感じると共に、気がつく

と自分の思い出を画面の中の風景に重ねあわせ、とても懐かしいような気持ちにさせてくれます。さて、この度当館は氏のご好意により十三点の作品をご寄附頂きました。そこで本テーマでは、今回新しく所蔵品となった十三点と、先にご寄附頂いた一点を加えた計十四点の作品を紹介いたします。

作品に込められた氏の、日常へのあたたかな眼差しを感じて頂ければ幸いです。



「芝居が来た」 平成5年(1993)

◇観覧料

大高生	一般	個人	団体
2800円	3500円	2800円	2200円

※中学生以下無料・団体は20名以上です。

市民ギャラリー 展覧会案内

後藤政博写真展

3月13日(金)～22日(日)
但し、初日は正午から
最終日は午後4時まで

最近デジカメで撮ってホームページで写真を仕上げています。今回の写真展もほとんどは、自分で仕上げた写真です。それから今は日本写真協会会員になり、中部圏を中心に出かけています。

入場料 無料
主催・連絡先 後藤政博

090-7749-6237

アートホール 催し案内

TOSHIOピアノ&リトミック教室

第3回 はっぴようかい

2月1日(日)
開演 午前10時30分

1年間のまとめの発表会です。5歳から小3まで、リトミック、ミュージックベル、ピアノソロ・連弾などで1度は耳にしたことがある曲を一生懸命演奏します。リコーダー&ピアノのミニコンサートもあります。お気軽にご来場ください。

入場料 無料
主催 TOSHIO

ピアノ&リトミック教室

連絡先

090-8269-8136
(藤井)

クロスワードパズル

ハガキにクイズの答え(マスを埋めてA～Eにあてはまる文字)、郵便番号、住所、氏名、年齢、会員番号をご記入のうえ、「美術館だより」への感想・希望を添えて「美術館だより」クイズ係「まで送ってください。正解者の中から抽選で10名様に素敵なプレゼントを差し上げます。応募締切：平成21年2月15日(日) 必着。

正解発表：次号美術館だより誌上に掲載します。

※応募に関する個人情報当選者への連絡以外に使用しません。

★ヒント★「食べ過ぎに注意」

※○には仮名が一文字入ります。

【タテのきざし】

- ①○○○は繰り返す。
- ②食べ過ぎるとオナラがでるかも。
- ③昆布や煮干で○○をとる。
- ④鶴は千年、○○は万年。
- ⑤長谷川等伯の長男、久蔵の桜図は「○○○○院」の所蔵です。
- ⑥「遠い」の反対。
- ⑨綿布を表裏に重ね合わせ一面に細かく刺し縫いにしたもの。
- ⑩当館が最初に購入した等伯作品「愛宕○○○○図」。
- ⑪ツルゲーネフの名作。40歳代の主人公が16歳の頃を振り返る…。
- ⑬路の分かれる所。○○○点。

⑮年中の福徳をかきよせる縁起もの。酉の市で売る。

【ヨコのきざし】

- ①ハワイへ行くと頭や首にかけてくれるもの。
- ④狸の背中が火事だ ○○○○山。
- ⑦夏のイベント。墓場や廃病院で。
- ⑧嫌いな子供が多い。美容や健康に。
- ⑪何も書いてない紙。
- ⑫のり、昆布、干し魚、干椎茸など。
- ⑭加賀は百万。○○高。
- ⑯にぎりこぶし。これで頭を「ボカッ」痛いなあ。
- ⑰当館所蔵、等伯の水墨作品。「○○○○睡図」。
- ⑱○○○食う虫もすぎずき。

答え

- A
- B
- C
- D
- E

			E			
			A			
	D	C				
B						

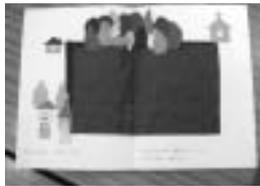
ボローニャ展報告



今年、ボローニャ展関連行事として初めて、一時保育とナイトミュージアムを実施しました。

一時保育では保育士さんにご協力いただき、3歳までのお子さんをお預りし、親御さんにゆっくり展覧会を楽しんでいただきました。ナイトミュージアムは「家族の会話を楽しんでいただく」という企画で、大人14名、子ども13名の参加者数にしては館内がいつもより賑やかでした。とても元気な兄弟や、小さいお子さんに優しく語りかけるお父さんお母さんの姿が印象的でした。

「かんたん絵本をつくろうよ」も、県外からのお申込があったり、毎年楽しみにしてくださるご家族がいらしたりと、年々皆様に広まっていることを実感しています。毎回ご指導くださったのは「絵本の会 もこもこ」の皆さんです。大人も子どもも、もこもこさんの話術にグイグイと引き付けられ、創作意欲がムクムクとわいてきて楽しい一時を過ごしていただけたことと思います。



今年は大人の人が自由に参加できる日を設け、子どもたちと同じプログラムを体験していただきました。

新しい作品とともに来年も皆さんをお待ちしています。

第9回 石川県七尾美術館 友の会鑑賞の旅を終えて

今回の「鑑賞の旅」ではリニューアルオープンした石川県立美術館の展覧会『法隆寺の名宝と聖徳太子の文化財展』見学をメインに金沢方面へ向かいました。

美術館へは開館時間の少し前に到着したのですが、正面入口にはすでに入館待ちの長蛇の列が！職員の方の誘導に従い館内講義室へ。嶋崎館長のお話しを聞き期待に胸が高鳴ります。明るく開放的な空間に新設されたエスカレーターを降りると、最初の展示室に国宝「玉虫厨子」が展示されていました。参加者皆さんの目が輝き、思わず「すごいねえ…」の声が漏れます。館長が作品の前で説明し始めると徐々に他のお客様も集まってきました。いつの間にか黒山の人だかりに…！そのような中でも全展示室を一緒に廻り、作品解説をしてくださった嶋崎館長、どうもありがとうございました。

素晴らしい作品をまだまだ鑑賞しつづけたい気持ちを抑えつつ昼食場所へ。加賀麩の懐石料理を楽しむ午後からは加賀友禅の彩色をする体験コースと、武家屋敷の町並み「長町」を散策する見学コースに分かれて行動しました。

体験コースでは「長町友禅館」職員の方の丁寧な指導と体験した方の手際とセンスの良さで予定時間より早く、美しい「染色額」が完成。

見学コースではボランティアガイド「まいごさん」の片岡さんに案内していただき長町界隈を散策しました。武家屋敷だけでなく、群青塗りのアーチやステンドグラスが美しい聖霊修道院の聖堂内部も特別に見学させていただきました。

帰路、車中でお楽しみ抽選会もあり、当選された方には喜びの微笑みが！

参加者皆様のご協力のもと「金沢」を満喫する楽しい旅となりました。ありがとうございました。



「能登畠山氏と能登の美術」友の会古文書講座開催報告

去る十月十八日、当館企画展「能登畠山氏と能登の美術」関連美術館友の会事業として、七尾市史編さん室の和田学氏を講師に迎えて「古文書講座」能登畠山氏関連の古文書を学ぶ講座を開催しました。

十八名の方々が参加され、展覧会を鑑賞した後に講座を開始。最初に、初めての方でも分かるように古文書の基礎についてのレクチャーがあり、続いて能登畠山氏などの関連古文書をテキストに、読解をしつつその時代背景や人物、事柄について話をされました。

難解な古文書ですが、先生は現代の言葉や風習なども比較しながら分かりやすく解説をされ、参加者の皆様は一言一句納得しながら聞いていく様子でした。

講師の先生、それからご参加頂いた皆様、本当にありがとうございました。



石川県七尾美術館友の会会員募集のご案内

平成21年度友の会会員を次の要領で募集いたします。現在会員の方で更新をご希望される方は改めてお申込み下さい。お申込みのない場合はそのまま退会となってしまいますのでご注意ください。

★入会手続き★

受付開始 3月1日(日)から【年度会費1,000円】
受付場所 当館受付カウンターまたは郵便受付
(郵便振替用紙をご利用下さい)

※郵便局備え付けの振替用紙の通信欄に必要事項《会員の区別(更新・新規・元会員)・郵便番号・住所・電話番号・氏名・生年月日》をご記入のうえ、会費を添えてもよりの郵便局窓口へお出し下さい。払込料金120円は申込者負担となりますのでご了承ください。

等伯コーナー

長谷川等伯展記念講演会報告

「智積院の障壁画」

——特に久蔵の桜図について——

講師 水尾 比呂志氏

(美術史家・武蔵野美術大学名誉教授)

今年には長谷川等伯の長男久蔵の生誕四四〇年という年にあたり、この七尾美術館では、久蔵の「桜図」が特別展観されておりますので、今日は障壁画というものと長谷川派の関係、そして「桜図」についてお話しさせていただきます。

まず、障壁画について概略をお話ししましょう。障壁画は、日本の寺院や宮殿、邸宅などの中に描かれた装飾画で、基本的には建築に付随している絵画として、大きく三つの種類に分けることができます。

第一は、建物に固定されているものです。九州に多い装飾古墳や高松塚古墳の壁画を初めとして、法隆寺金堂の壁画など非常に歴史が古く、豊富であります。また、壁画は壁面そのものに描くのが普通ですが、描いた絵を壁面にはめ込むやり方もあります。これを「壁貼り付け絵」、或いは「壁はめ込み絵」ともいいます。第二は、固定はされておりますが、敷居で移動させることができるもの、これに属して一番多いのが「襖絵」です。また襖絵と同じような性質のもので、「扉絵」や「板戸絵」があります。それから第三が、自由に移動させられるものです。主に屏風で、建築空間の任意の所へ置いて、色んな役に立てることが出来ます。似たようなものに「衝立」というものもあります。これも「屏風絵」に含まれることができると思います。大体この三種類を「障壁画」とか「障屏画」と呼んでいます。智積院の場合は、障壁画が主ですが、屏風もありますので、「障屏」という方が妥当かも知

れません。

ところで、今日我々が美術という言葉で呼んでいるものは、大体「用」を離れてそれを観る、鑑賞する、その対象であるというのが通念になっておりますが、実は鑑賞画も考えてみれば一種の「用」であるといえないこともない訳です。しかし、同じ鑑賞画の中でも、西欧、ヨーロッパを中心に発達しました鑑賞画は、それを描いた画家の自己主張と申しましたようか、個性と才能と、その絵に込めた画家自身の意図などが強く出てきておりまして、鑑賞する場合でも、そういうところに主眼を置くという性格があります。ところが、日本の絵画の場合には、同じ鑑賞する場合でも、もちろんそこには画家の個性というものが表れるのは当然のことですが、同時に絵が一体どういう役割をしているのかということが、非常に大事なことになってまいります。障屏画の場合は、明らかに建造物の中の間仕切りという役目をしていてと同時に、それが用いられることによって生活が非常に豊かになる、楽しみがそこに加わってくるという性格があります。日本の絵画の場合の鑑賞性というのは、生活と密接に結びついているのです。日本人の生活は、そういったことを中心に展開してきました。これが、東と西の、特にヨーロッパと日本の絵画の非常に大きな違いであります。



水尾 比呂志 氏

の基本性である「用」という性質は、依然として存在していると考えられます。そこが日本絵画の特色であり、また面白さであり、見所でもあろうかと思うのです。では、その障屏画の「用」というものは、どういう「用」に役立ってきたのかと考えますと、古い時代には仏画をその最たるものとして、宗教的な礼拝対象としての意味合いを持っておりました。それが次第に世俗生活を装飾するような生活性へと変わる、その生活性、装飾性という面が非常に発達するようになります。これが日本の歴史で「近世」と呼んでいる時代で、室町後期の応仁文明の乱を境に、日本の造形の世界がその性格を大きく変えるのです。それまで日本の絵描きは、大体画工という言葉で総括していいような性格でした。つまり個人名で知られるのではなくて、集団の工房、画房、或いは流派の作品というような捉えられ方をされていたのです。そこでの絵描きは、生活に役立ついろいろな工芸品を作る匠たちの一種であると見なされておりました。その絵描きたちが、個性を主張しだしてくる。そして作品が、画工たちによって大量に作られた一種の工芸絵画という性格から、個人的な創作絵画の性格へ変わっていくという現象があります。工芸的な性格というものは依然としてもっておりますが、大きな流れとしては、集団制作よりも個人制作、集団性よりも個人性、別の言葉で申しますと、工芸性よりも美術性へと、そういう性格が変わって行くのです。そして障屏画の分野でも、次第に実用性から鑑賞性を強くしてくるという移り行きが、明らかになっております。それは、日本の建造物の様式の流れに沿った移り行きでもありました。その変化は、大雑把に申しますと、寝殿造りから書院造りへと動くと考えていいと思います。

寝殿造りといえますのは、ワンルームシステムで、大きな部屋が中央にありまして、平安時代に非常に発達しました。この造り方の特色は、その室内空間と屋外の空間が、物理的にも精神的にも、自由に行き来ができるという点にあります。生活する上では部屋に分けなければなりません。それには間仕切りが必要ですから、屏風とか襖とか、軟障とか几帳とかいうものが作られてきます。そこに絵が描かれるということでは障屏画が発達したのです。その後、部屋が大きなワンルームではなくて、例えば廊下で部屋を連ねてというふうな、それぞれの部屋が独立して行きます。お寺の建築の中で、書院という特別の部屋が独立して作られました。そのお寺の和尚の私的な生活空間、これが書院というものです。この書院の造りが、大体室町時代の末くらいには定まってきました。床の間があり、床の間の横に違い棚が設けられ、また横に書院窓という窓が造られています。向こう側に障子が入って机の代わりをし、この上で読書したり物を書いたり、色んな器物を並べて鑑賞したりするような造りです。そして、寝殿造りの中で用いられていた絵画が、この書院造りの中で有効に活用されるようになるわけです。床の間の後ろの壁には、床貼り付けという絵画が貼られたり、描かれたりします。そして部屋と部屋との間を仕切る襖が生まれて、その襖に描かれる絵が非常に発達します。それからまた、屏風を活用する生活様式が発達し、屏風が大きな絵画の画面になって行くのです。そういう大きな画面に描くことが、画家たち、画工たちの仕事の中心を成す時代になります。彼らの仕事の中で、一番重要であり腕の振るいどころとなつたのが、襖と屏風という建築に付随する道具、装置で、それが絵画の主たる画面になるのです。

あれほどたくさん絵を制作し有名になりましたのは、そういった権力者たちの生活空間を装飾するという機能をもった絵画が要求されたからでした。その一つとして、長谷川等伯の名画も描かれたのです。

七尾を出て等伯が京都へ行った時代、画壇の中心勢力は狩野派です。狩野派は永徳が桃山時代にで、大変精力的な活動をしました。そして狩野派という一つの大きな画派を形成し、権力者たちと結びついて、大きな仕事を獲得して行きます。等伯が京都へ上ってきた時も、やはり、狩野派の勢力が非常に強い時代でした。しかし、等伯もそれには負けていなくて、自分の子どもや、彼が目をつけた有能な画家たちを引き込んできたり、娘のお婿さんに迎えたりして、狩野派に対抗できるような長谷川派という画流を形成するのです。そして長谷川派の全力を挙げて各地のお寺に制作の仕事を獲得していくのですが、一番大きな仕事が智積院の障壁画でした。

この智積院の障壁画は、幸いその中の非常に優れた作品が今日何点か残っておりまして、私たちは等伯を中心とした長谷川派の仕事というものを実際に観ることができまして、それが狩野派や他の画派たち、画家たちと、どういふところで違う特色をもっているのかということも、確かめることができます。智積院の障壁画群は、非常に出来栄が素晴らしいということと共に、長谷川派の仕事の性質を、よく私たちに知らせてくれるのです。

(現在智積院にある障壁画が、祥雲寺室内に描かれた当時、どういふふう配置されていたかを復元したビデオを上映)

長谷川派の障壁画のまとまったものが、今日も何箇所か残っています。その代表的なものもご紹介しておきましょう。まず第一が智積院で、なかでも代表的なのが、等伯が描いたとされます「松に黄蜀葵図」です。それから「松に秋草図」、それから「楓図」、そして、久蔵の「桜図」であります。その他に「松に立葵図」

があり、「松に雪松図」は等秀の作品だというふうにかえられています。何れも落款はなく、判も捺してないので、文献とか、絵そのものの画法、画質、特色といったようなものから作者を推定していくことができます。だから研究者によって少し違いがでてきますが、大体は意見が一致しているようです。

それから秀吉の花見で有名な京都の醍醐寺、その三宝院にも長谷川派の障壁画が残っております。もう四十年前のことになりますが、それぞれの画家について、私は甲乙丙丁という四人に分けてみました。その後研究が進みまして、山根有三先生が、私が甲乙丙丁と仮に呼んだものを、これは誰でこれは誰というふうに決めてくださいました。そしてその中の「四季柳図」、これを山根先生は等伯だと断定されたのです。また「山水風景図」というのは宗宅であり、「老杉・竹林遊禽図」を等秀の筆、「秋草図」は等伯というふう

に、筆者を定められました。私もその山根先生の推定がほぼ間違いないだろうというふうに思っています。次に京都の禅林寺の襖絵で、やはり等伯と等秀と等学

の作品であると、これもまた山根先生の推定であります。同じく京都の妙蓮寺の襖絵に、等伯が描いたと思われるものが一点、等学と等秀にあてはめることができる作品が、残っております。

その他に、どこに置いてあったのかはつきり分らない屏風画がかなりあります。等伯のもありますし、息子の宗宅、宗也、或いは娘婿の等学、等秀のものと考えていい作品が残っています。こういうふうに見て行きますと、智積院だけでなく、長谷川派という画派は、等伯を中心に日本の障壁画の最盛期を担った画家たちであったということが、はっきりしてきました。しかし、その中で残念なのは、久蔵であります。二十六歳という若さで亡くなりますが、「桜図」の他に清水寺の「朝比奈草摺曳図」という絵馬と、平家物語の大原御幸の主題を描いた屏風を残すだけなのです。この三点を見ますと、非常に画風が違うんですが、特に違うのが「朝比奈草摺曳図」です。絵馬ですから太い

描線を使っていますし、題材がそういうものですから豪快な感じがします。それと対照的なのが「大原御幸図屏風」で、これはとても繊細な感じなんです。大和絵とする絵で、細かい筆遣いのなかなかの名品です。これらだけ見ても、久蔵という人は並の絵描きではなかったということが、はっきり分かります。強さと細かさ

と両方の要素を持つていながら、新しい画風を作り出したのが智積院の「桜図」であります。日本の美術史をかえりみますと、障壁画の一番の盛期が桃山時代から江戸時代の初めにかけてで、等伯や永徳、友松や等顔といった錚錚たる大画人たちの世代

でした。その後、新しい絵画様式を切り開いた世代が現れてきました。久蔵はその代表的な一人で、もう一人が、装飾画の分野で独自の表現を築き上げた天才、俵屋宗達であったと思います。

そういう人たちの残した作品を見ますと、日本の絵画の独自性というものが、ルネッサンス絵画のダ・ヴィンチとかミケランジェロとかラファエロとかいった人たちの絵と、どういふところが違うかということも、よく分かる気がします。

そのことは、また別のテーマでありますので、今日のお話はこのくらいで終わらせていただきます。御清聴ありがとうございます。

(※本文は平成二十年四月十三日に行われた記念講演会の内容を、当館の責任においてまとめたものです)



展示室風景



平成21年度 春の特別展予定



平成21年4月25日（土）～5月31日（日） 会期中無休

生誕地・没後400年記念前年祭 「長谷川等伯展～信春から等伯への軌跡～」

平成22年は等伯没後400年という節目の年で、東京国立博物館と京都国立博物館で大々的な「長谷川等伯展」が開催されます。そこで、出身地として毎年「長谷川等伯シリーズ展」を開催している当館では、その前年にあたる平成21年に“生誕地・没後400年記念前年祭”「長谷川等伯展」を開催します。七尾初公開作品を中心に、一部長谷川派の作品も含めて、初期の仏画や晩年の水墨画まで計14点を紹介します。

また、前年祭を記念して、★洞爺湖サミット会場に展示された等伯筆国宝「松林図屏風」の複製や、★長男久蔵筆国宝「桜図」と等伯筆国宝「楓図」を綴れ折りで表現した、京都祇園祭浄妙山前懸と後懸も特別公開しますのでお楽しみに！

★記念講演会

日時：4月29日（水・祝）午後2時より

講師：松嶋雅人氏（東京国立博物館主任研究員）



①



②



③

①「萩芒図屏風」内右隻 長谷川等伯 京都市・相國寺承天閣美術館蔵 ②「寒江渡舟図」長谷川信春（等伯） 個人蔵 ③重要文化財「日昇上人像」長谷川信春（等伯） 京都市・本法寺蔵

平成21年度 市民ギャラリー&アートホールの利用申込みについて

七尾美術館では個展、グループ展、演奏会など、幅広い芸術活動の発表の場として市民ギャラリーとアートホールの貸室を行っています。平成21年4月からのご利用については、1月4日（日）～22日（日）を第1次募集期間として受付します。展覧会等の関係上、ご利用いただけない期間もありますので、詳しくは七尾美術館までお問い合わせください。

【利用可能期間は当館ホームページでも確認できます】



割引、プレゼントなど特典いろいろ / ぜひ当館でもご利用ください。



飛行機……能登空港から能登有料道路利用約45分
車……金沢から能登有料道路利用約1時間15分
タクシー……JR七尾駅から約5分
徒歩……JR七尾駅から約20分
市内循環バス……JR七尾駅前5番乗り場から西回りに乗車約6分(まりん号)

休館日のお知らせ

(1月～3月)

- ◆ 1月 1～3, 5, 13, 19, 26
- ◆ 2月 2, 9, 12, 16～20, 23
- ◆ 3月 2, 9, 16, 23, 30

◎次号・第57号（春号）は4月1日発行予定です。